

# 複合辞に関する史的研究

－ 「ところが」と「ところで」を中心に－

安志英\*

nazue@hanmail.net

## Contents

1. はじめに
2. 調査資料及び考察方法
3. 各作品に見られる「ところが」の様相
  - 3.1. 江戸時代までの「ところが」の様相
  - 3.2. 明治時代からの「ところが」の様相
4. 各作品に見られる「ところで」の様相
  - 4.1. 江戸時代までの「ところで」の様相
  - 4.2. 明治時代以降の「ところで」の様相
5. おわりに

## Abstract

The purpose of this thesis is to analyze the origin of the compound particles 「tokoroga」 and 「tokorode」 and follow the integration of the compound particles in language over time. The following information was derived as a result of the analysis

(1) The compound particle 「tokoroga」 seems to have originated during the Meiji periods and was initially used more commonly as a contrary conjunction rather than a conditional conjunction because the contrary particle 「ga」 had a stronger effect than 「tokoro」. With passage of time, 「tokoro」 gradually became more commonly used as a conditional conjunction due to the strong linkage of the word to scenic presentations. As a result of language development, 「tokoro」 has become a compound particle in common language use today.

(2) The first known appearance of 「tokoroga」 in Japanese literature was in the year *gyokuzinsyou* 1563 and it was originally used as a contrary conjunction.

---

\* 立教大学大学院 博士後期課程 日本語学専攻

However, it was not used ever again in the Kamigata dialects until the Edo periods.

(3) During the Meiji periods, as the new compound particles 「-temitakoroga」 and 「-nositakoroga」 began to be used, 「tokoroga」 became more widely used as a contrary conjunction.

(4) The form of the compound particle 「tokorode」 transformed over time from 「tokoronite」 to 「attributive + tokorode」 to its final form 「tatokorode」 during the 16th century.

(5) The first known appearance of 「tokorode」 in Japanese literature *Tyukaz-yakubokusisyō* was approximately in the year 1520 and it was originally used as a conditional conjunction.

(6) The compound particle 「tokorode」 is commonly used as a conditional conjunction in the meaning of fact. However, there is some evidence that it was also used as a conditional conjunction in the meaning of supposition in the Kamigata dialect.

(7) During the Meiji periods, new compound particles emerged in addition to 「tokorode」, including 「-tositatokorode」, 「-temitakorode」 and 「-nositakorode」. The compound particle 「tokorode」 was considered a conditional conjunction of supposition as a result of the usage of adverbs such as 「tatoi」, 「yoshinba」, 「karini」, and 「yosij」.

**Key Words**: 複合辞, 条件表現, ところが, ところで(compound particles and compound auxiliary verbs, conditional expressions, tokoroga, tokorode)

## 1. はじめに

現代日本語において結果が予想・期待に反する意を表す時に用いられる複合辞<sup>1)</sup>に「ところが」と「ところで」がある。その意味についてみると、『日本語表現

1) 複合辞とは、いくつかの語が一まとまりとなり、その一まとまりが固有の「付属語」(辞的な意味を担うものとして用いられる形式を指す。たとえば、「において」、「ほうがよい」、「なければならぬ」などがこれに属し、「ほう」「が」「よい」のような語が複合して一まとまりとなり、固有の意味になった表現を言う。このような複合辞について松木正恵は、形式全体で一つの助詞と同様の働きをするものを助詞性複合辞、同じく、形式全体で助動詞と同様の働きをするものを助動詞性複合辞としている。本稿で考察する「ところが」と「ところで」は助詞性複合辞の逆接仮定条件の中に属するものである。

文型』<sup>2)</sup>では、

【「ところが」「ところで」】

両方の表現は、過去・完了の助動詞「た」をうけて未成立の事柄を条件として仮定し(前件)、それが無意味・むだなこと、役に立たないこと、予期に反したことに終わってしまうという話し手の意見を後件で主張するもので、「たとえ～しても」の意を表す。

【例】① どんなに考えたところが、此先の楽しみはないばかりか。

② たとえ、手に入れたところで、下からかけるわけにはいかないのだ。

と記述されている。

現代日本語ではこのような意味で使われているものの、日本語史における「ところが」と「ところで」は少し違う意味で使われていたようである。それに関する先行研究はほとんどなく、唯一霧岡昭夫(1972)<sup>3)</sup>があり、逆接仮定条件を表す「ところが」と「ところで」を中心に、その成立時期について論じている。

近世以降の、江戸語・東京語を中心に、特に口語体の作品を対象として「ところが」と「ところで」を通時的に見たもので、簡単にまとめると、「ところが」が順接と逆接の確定条件を表すのは1770年から1800年前後で、その後、現代まで用いられていると述べている。そして、逆接仮定を表す「ところが」は、1810年すぎから用いられるようになったとする。なお、1810年ごろに「ところが」は順接または逆接の確定条件表現から逆接仮定条件に用法を広げ、さらに1830年ごろに「たとえ」「いくら」などの語と呼応するようになってその用法を確立するに至ったとも述べている。

一方、「ところで」の順接確定条件については、ロドリゲスの『日本大文典』にも記述があるように、その頃すでに存在し、今のように用いられていた反面、逆接

2) 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク、113-114頁

3) 霧岡昭夫(1972)「『ところが』と『ところで』の通時的考察—その逆接仮定条件表現の成立をめぐる—」『国語学88』国語学会、43-55頁

仮定条件を表す「ところで」は、1880年代後半にかなり一般的に用いられるようになり、同時に「たとい」「よしんば」などの逆接仮定条件句と呼応して共に用いられるようになったという。

特に、逆接仮定条件を表す両表現の発達段階は「ところが」の方がより早く見え、ちょうど衰退していく頃から「ところで」が逆接仮定条件を表すようになったと主張する。それを簡単に図で示すと次のようである。

〈図一 靄岡昭夫による「ところが」と「ところで」の用法の変化〉

「ところが」		
(一八世紀)	(一九世紀)	(現在)
順接または逆接確定 ⇒ 順接または逆接確定、逆接仮定 ⇒ 順接確定・逆接確定		
「ところで」		
(一六世紀)	(一九世紀)	(現在)
順接確定	⇒	逆接仮定 ⇒ 逆接仮定

しかし、すでに上述の論文にも言及されているように、「ところが」と「ところで」の成立時期はまだ明らかになっていないこと、「ところが」の順接確定条件の場合、江戸と上方で同じ時期に使われているものの、どちらが先に用いられていたのか、「ところで」が順接確定条件を表す用法だけを有していたのか、そして、本論文の主たるテーマである複合辞としての「ところが」と「ところで」はどうやって定着したのかという問題などは未だ明らかでないのが現状である。

そこで、本論文では、この点に着目し、先行研究ではあまり扱っていない江戸語以前の資料や明治・大正時代の資料を通して「ところが」と「ところで」の全体的な変遷を考察しながら、複合辞としての定着過程について考えることにする。

## 2. 調査資料及び考察方法

上述したような意味で使われる「ところが」と「ところで」の初出やその変遷を調べるため、今回利用した調査資料は次のようである。

- [1] 竹取物語(九世紀末期頃) [2] 伊勢物語(平安中期) [3] 土左日記(九三五)  
 [4] 大和物語(九五―頃) [5] 宇津保物語(九七二か) [6] かげろふ日記(九七四) [7]  
 落窪物語(一〇世紀後半か) [8] 源氏物語(平安中期成立) [9] 枕草子(平安中期成  
 立) [10] 紫式部日記(一〇―頃) [11] 和泉式部日記(一〇―頃) [12] 堤中納言  
 物語(一〇五五) [13] 更級日記(一〇五九頃) [14] 大鏡(一一三四成立か) [15] 今  
 昔物語集(一二世紀成立か) [16] 新古今和歌集(一二〇五) [17] 方丈記(一二―  
 か) [18] 平家物語(一二二〇か) [19] 宇治拾遺物語(一二二―頃) [20] 保元物語  
 (一三一八か) [21] 徒然草(一三二九以降か) [22] 平治物語(一四四六以降か) [23]  
 曾我物語(一四世紀前半か) [24] 中華若木詩抄(一五二〇頃) [25] 玉塵抄(一五六  
 三) [26] 天草版平家物語(一五九二) [27] 天草版伊曾保物語(一五九三) [28] 醒睡  
 笑(一六二三) [29] 昨日は今日の物語(一六二四年頃か) [30] 大蔵虎明狂言集(一  
 六四二写) [31] 好色一代男(一六八二) [32] 好色一代女(一六八四) [33] 出世景清  
 (一六八五) [34] 好色五人女(一六八六) [35] 世間胸算用(一六九二) [36] 西鶴織  
 留(一六九四) [37] 曾根崎心中(一七〇三) [38] 用明天王職人鑑(一七〇五) [39]  
 重井筒(一七〇七) [40] 堀川波鼓(一七〇七) [41] 丹波与作待夜の小屋節(一七〇七  
 頃) [42] けいせい反魂香(一七〇八) [43] 冥途の飛脚(一七一―) [44] 夕霧阿波鳴  
 渡(一七一二) [45] 国性爺合戦(一七一五) [46] 大経師昔暦(一七一五) [47] 鐘の  
 権三重帷子(一七一七) [48] 博多小女郎波枕(一七一八) [49] 平家女護嶋(一七一  
 九) [50] 心中天の網島(一七二〇) [51] 女殺油地獄(一七二―) [52] 心中宵庚申  
 (一七二二) [53] 八百屋お七(一七三一か) [54] 夏祭浪花鑑(一七四五) [55] 仮名  
 手本忠臣蔵(一七四八) [56] 新版歌祭文(一七八〇) [57] 卯地臭意(一七八三) [58]  
 東海道中膝栗毛(一八〇二～一八〇九年) [59] 浮世風呂(一八〇九～一八一三年)  
 [60] お染久松色読販(一八一三) [61] 浮世床(一八一四) [62] 春色梅児誉美(一八  
 三二～三三年) [63] 春色辰巳園 (一八三五) [64] 会話日本語(一八六三) [65] 会  
 話編(一八七三) [66] 浮雲(一八八七) [67] 舞姫(一八九〇) [68] うたかたの記(一  
 八九〇) [69] 小公子(一八九〇) [70] 大つごもり(一八九四) [71] にごりえ(一八九  
 五) [72] 一三夜(一八九五) [73] たけくらべ(一八九五) [74] ゆく雲(一八九五)

[75] うつせみ(一八九五) [76] 片恋(一八九六) [77] われから(一八九六) [78] わかれ道(一八九六) [79] 金色夜叉(一八九七) [80] くされ縁(一八九八) [81] 続金色夜叉(一八九九) [82] 高野聖(一九〇〇) [83] 重右衛門の最後(一九〇二) [84] 我輩は猫である(一九〇五) [85] 女客(一九〇五) [86] 其面影(一九〇六) [87] 坊ちゃん(一九〇六) [88] 草枕(一九〇六) [89] 二百十日(一九〇六) [90] 破戒(一九〇六) [91] 野菊の墓(一九〇六) [92] 蒲団(一九〇七) [93] 虞美人草(一九〇七) [94] 野分(一九〇七) [95] 三四郎(一九〇七) [96] 坑夫(一九〇七) [97] 文鳥(一九〇七) [98] 夢十夜(一九〇七) [99] 平凡(一九〇七) [100] 浜菊(一九〇七) [101] 鶏(一九〇九) [102] キタ・セクスアリス(一九〇九) [103] 田舎教師(一九〇九) [104] それから(一九〇九) [105] 永日小品(一九〇九) [106] 姪子(一九〇九) [107] 青年(一九一〇) [108] 家(一九一〇) [109] 杯(一九一〇) [110] 譜請中(一九一〇) [111] 門(一九一〇) [112] 国貞えがく(一九一〇) [113] 思い出す事など(一九一〇) [114] 歌行灯(一九一〇) [115] 土(一九一〇) [116] カズイスチカ(一九一一) [117] 妄想(一九一一) [118] 百物語(一九一一) [119] ケーベル先生(一九一一) [120] 変な音(一九一一) [121] 手紙(一九一一) [122] 雁(一九一二) [123] かのように(一九一二) [124] 行人(一九一二) [125] 興津弥五右衛門の遺書(一九一二) [126] 彼岸過迄(一九一二) [127] 守の家(一九一二) [128] 阿部一族(一九一三) [129] 護持院原の敵討(一九一三) [130] こころ(一九一四) [131] じいさんばあさん(一九一五) [132] 羅生門(一九一五) [133] 余興(一九一五) [134] 二人の友達(一九一五) [135] 山椒大夫(一九一五) [136] 最後の一句(一九一五) [137] 道草(一九一五) [138] 硝子戸の中(一九一五) [139] 寒山拾得(一九一六) [140] 鼻(一九一六) [141] 芋粥(一九一六) [142] 高瀬舟(一九一六) [143] 高瀬舟縁起(一九一六) [144] 明暗(一九一六) [145] 運(一九一七) [146] 偷盗(一九一七) [147] 邪宗門(一九一八) [148] 袈裟と盛遠(一九一八) [149] 地獄変(一九一八) [150] 竜(一九一九) [151] 売色鴨南蛮(一九二〇) [152] 好色(一九二一) [153] 往生絵巻(一九二一) [154] ある女の生涯(一九二一) [155] 俊寛(一九二二) [156] 藪の中(一九二二) [157] 六の宮の姫君(一九二二) [158] 三人(一九二四) [159] 熱海土産(一九二五) [160] 食道(一九二六) [161] 嵐(一九二七) [162] 分配(一九二七)

考察方法として、まず初出を調べるため、上に提示した資料の中から「ところが」と「ところで」、およびそれぞれに相当する語句をできるだけ多くの資料から調べることにした。

### 3. 各作品に見られる「ところが」の様相

条件表現としての「ところが」は、江戸時代までの資料ではあまり見えず、明治時代以降によく見られる。その用法としての特徴は明治前後にはっきり区別されることから、江戸時代までとその以降に区別してみることにする。

#### 3.1. 江戸時代までの「ところが」の様相

まず、江戸時代までの上で列挙した資料作品から「ところが」の用例を収集した結果、順接確定条件が4例、逆接仮定条件が9例、逆接確定条件が22例で、その用例数を表4)にすると、次のようである。

〈表1〉「ところが」の江戸時代までの用法の様相

資料	用法	順接		逆接	
		仮定	確定	仮定	確定
玉麈抄(1563)					1
新版歌祭文(1780)					2
卯地臭意(1783)					3
東海道中膝栗毛(1802~14まで)			4	2	4
お染久松色読販(1813)				2	
浮世風呂(1809~1813)				2	5
浮世床(1814)				1	1
春色梅児誉美(1832~1833)					3
春色辰巳園(1835)				2	3
合計		0	4	9	22

「ところが」の全体的な傾向について見てみる。従来の研究では、「ところが」の曖昧な用法が多いことから、ほとんどそれらを区別せず順接と逆接の確定表現として捉える傾向があった。しかし、本研究ではそれらをはっきりと区別して分類したところ、逆接確定表現が順接確定表現を5倍上回り、「ところが」は逆接確

4) 調べた資料の中で「ところが」の用例が収集できた作品だけを挙げることにする。

定表現として当時多く使われていたことが分かった。そして、同じ逆接条件でも逆接確定表現は逆接仮定表現を2倍以上上回るということが明らかとなった。

順接条件表現より逆接条件表現が多いのは、「ところが」はこの時期までは複合辞として用いられるのではなく、「ところ」+「が」の連接として、それぞれの語の性質が強いために、逆接助詞としての「が」の意味が強く反映されて、逆接条件として用いられることが多かったと考えられる。

そして、靄岡昭夫は、「ところが」の場合、江戸・上方のどちらで先に用いられるようになったかという点はまだ明らかではないという言及がなされているが、今回近世前期の浮世草子や浄瑠璃などの資料を調べた結果、「ところが」は一つの用例も収集できず、『新版歌祭文(1780)』に逆接仮定を表す用例がようやく見えた。このことから「ところが」は、江戸語から使われはじめたのではないと思われる。

次に、「ところが」の初出について見てみる。靄岡昭夫によると<sup>5)</sup>、『鹿子餅(1772年)』であって、その用例は逆接確定である。

- (1) 「よし」と言ひて出た所が何も用なし。 [鹿子餅 三六三頁]

そこで、1772年以前の資料を視野に入れて用例を探してみたが、その用例はほとんど見えず、『玉塵抄(1563)』では、逆接確定に当たる用例であった。

- (2) 蔡の者が呉元済にあいて離儀していた所か立て呉元済をたいぢしたことの嬉しいことは [玉塵抄 一七]

この資料から約200年以上たった1780年から再び「ところが」が見えるようになる。次がその例である。

- (3) 裾貧乏のはった行過丁稚め。首綱のかゝること言訳に如在が<sup>あ</sup>ろかい。小倉の屋敷へ請取に往た為替の銀御役人から改めて渡ったは正真。内へ戻って明た所がわやひんのどふみやく。道の間ですりかへた品玉の太夫。早咲久松

5) 前掲論文(3)、46頁



でございます。

【新版歌祭文 野崎村の段】

これは文脈から見て逆接確定条件と見ることができる。

そして、鶴岡昭夫<sup>6)</sup>は逆接仮定条件の場合、『浮世風呂』からその形式が初めて見えると述べ、用例(4)をあげているが、本研究ではそれより11年ほど早い『東海道中膝栗毛』でその用例が確認された。

- (4) 人を雇って買ひに遣った所が、其の日の間にあはず、又、合た所が日雇銭のすくなずくも百五十文もやって大根の値が六十四文もせう。都合で二百二十も出して大根を買ふに鰹は一本三十六文だ [浮世風呂 四編巻之下]
- (5) さる市 「ホンニわすれたトちよくをとりあげて、のまうとしたところが、さけはいつすいもなし。 [東海道中膝栗毛 三編下]

『東海道中膝栗毛』には、特に、直接的な因果関係のない順接的な表現が初めて見える。用例(6)と(7)がそれである。現代日本語においてもこのような用例があるが<sup>7)</sup>、今日使われている用法の前身となるものであろう。

- (6) 「ドレ>>、北八見や。ざつとした所が此書附だ」 [東海道中膝栗毛 七編上]
- (7) 弥二郎このふろのかつてをしらねば、そのういっているをふたところへ、何ごころなくとつてのけ、ずつとかたあしをふんごんだところが、かまがじきにあるゆへ大きにあしをやけどして、 [東海道中膝栗毛 初篇]

接続として「ところが」は、当時から「た形」に接続し、現在までそのような形で使われてきたと思われる。

6) 前掲論文(3)、50頁

7) 動作を表す動詞のタ形に付いて、後に続くことからの成立や、発見のきっかけを表す。前後にくることからは直接的な因果関係はなく「…したら、たまたま/偶然そうであった」という関係である。後に続くことからは前の動作をきっかけに話し手が発見した事態で、すでに成立している事実の表現が用いられる。(用例)教室に行ってみたところが、学生は一人もいなかった。(グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版、328頁)

### 3.2. 明治時代からの「ところが」の様相

明治時代からの「ところが」を見ると、江戸時代までのそれよりも用例数が増え、その用法も次第に落ちついてくる。明治時代までの「ところが」は江戸時代と同様に、逆接確定条件の用例は多くは収集できなかったが、順接確定条件、逆接仮定条件と同じくらいの割合であった。調査した範囲は1926年までの資料であるが、1912年以降になると、順接の用例が全く見えなくなる。

〈表2〉 明治から大正時代の小説における「ところが」の様相

年度	用法	順接		逆接		備考
		仮定	確定	仮定	確定	
1887				1	1	
1895				2		
1897			2	1	1	
1899			1	1		
1902				1	2	
1905			2	1		
1906			1		1	前提1
1907			1			
1908			1	1	1	
1909					3	両方可能1
1910			2	1	1	前提4
1911					2	
1912				2	3	
合計		0	10	11	15	6

明治後半には順接条件表現が増えることが特徴的であるが、それは逆接助詞である「が」の勢いが衰え、「ところ」と「が」がそれぞれ本来の意味を失い、「ところが」という複合辞性を持つようになったからであろう。

そして、「ところが」は、順接とも逆接とも捉えることができる用例もみえ、また前提的な意味で使われる用例も見えるようになるのもその一つの特徴である。これは江戸時代までの用例(6)(7)と同じ傾向で、「ところが」が複合辞として定着していく過程がうかがわれる。

(8) 実は此頃或雑誌を読んだところが、その中に精神病患者のことが書いてあった。

[島崎藤村 破戒]

(9) 宿の内儀はやはりそれ者の果だ。仕方がないから、内儀に事情を話して、お前さんが探出したら礼をすると言ったところが、内儀は内儀だけに、考えた。なんでもそういう旦那には、なるべく早く金を費わして了うというのが、あの社会の法だとサ。

[島崎藤村 家]

(10) 森本は腹が減って仕方がないから、凝と仰向に寐て、ただ空を眺めていた所が、仕舞にぼんやりし出して、夜も昼も滅茶苦茶に分らなくなったそうである。

[夏目漱石 彼岸過迄]

また、<表3>で示したように、「ところが」だけではなく、「一てみたところが」、「一にしたところが」などの用例も見えるようになり、新しい連語形式も現れてくる。その用例はすべてが逆接仮定条件であることも注目される。

そして、これまでの「ところが」の用法からみると、「ところが」は複合辞としての性質が弱いもので、新しい連語形式が若干現れたものの、その用例があまり見えない。これは、「ところが」は「ところ」という語のもつ場面の提示の意が強くなり、その用法が現在まで残って、順接にも逆接にも理解される曖昧な用法になったといえる。

<表3> 新しい連語形式を持っている「ところが」の様相

年度 \ 形式	一てみたところが(逆接仮定)	一にしたところが(逆接仮定)
1910		1
1912	1	1

(11) 残念がらないにしたところが、切角来たのが無駄になったとだけは思うに違いない。

[森鷗外 雁]

(12) しかしこう云うことを洗立をして見た所が、確とした結果を得ることはむづかしくはあるまいか。

[森鷗外 かのうに]

## 4. 各作品に見られる「ところで」の様相

次に、「ところで」であるが、「ところが」と同じく、江戸時代までの資料にはあまり見えず、明治以降に多く現れる。そして、その用法としての特徴も「ところが」と同様に、明治前後にはっきり区別されることから、江戸時代までとその以降に分けて考察することにする。

### 4.1. 江戸時代までの「ところで」の様相

江戸時代までの資料作品から「ところで」の用例を収集した結果、順接仮定条件が3例、順接確定条件が77例で、逆接条件は全く見当たらなかった。

「ところで」の場合、「ところが」に比べると、条件表現として現れるのはより遅いが、条件表現ではない用法で用いられるのはその時期がより早い。すなわち、条件表現として一般的に使用されたのは一六世紀であるが、「ところで」の初出は『天草版平家物語』であった。その用例は(13)のように、すべて場面を表す用法に限られている。

- (13) 兼平も瀬田でいかにもなりませうずるを君のお行方のおぼつかなきに、敵の中に取り籠められてござったをうち破って、これまで参ってござると、申したところで、木曾殿契りはまだ尽きせぬぞ、木曾が勢はこの辺にこそあるらう、  
[天草版平家物語 第四]

そして、複合辞としてようやく定着していくのは、『天草版伊曾保物語』『大蔵虎明本狂言』からである。順接確定条件を表す「ところで」は、『大蔵虎明本狂言』などの口頭語資料に頻出し、収集できた順接確定条件は『大蔵虎明本狂言』の場合、全体の68パーセント、『天草版伊曾保物語』の場合、26パーセントで、この二つの口頭語資料に全体の94%が集中している。江戸時代までの「ところで」の用法は口頭語的な性質をもつものであったと見られ、当初は話し言葉の中でよく使われていたといえよう。

〈表4〉「ところで」の江戸時代までの用法の様相

資料	用法	順接		逆接	
		仮定	確定	仮定	確定
中華若木詩抄(1520頃)			1		
天草版伊曾保物語(1593)			20		
大蔵虎明本狂言(1642写)	2		52		
丹波与作待夜の小屋節(1707頃)			2		
浮世床(1814)	1		1		
春色辰巳園(1835)			1		
合計		3	77	0	0

また、仮定条件としての「ところで」が一つも見えない『天草版平家物語』では、「た」が接続する場面を表す用例が多くみえる。しかし、『天草版伊曾保物語』計35例の用例の中、「終止形＋ところで」の15例はすべて場面を表す用例で、20例の「た＋ところで」はすべて順接確定条件である。

- (14) 三人の者共かしまつて、「いづくまでも行幸のお伴を仕らうずる。」と申し  
た所で、宗盛 「汝等がしきだいはさる事なれども、魂はみな東國にこそあ  
 らうずれ。 [天草版平家物語 第四]
- (15) その人「これは狼籍至極なやつちや」というて、すでに籠者になさうとすると  
 ころで、イソボが言ふは、 [天草版伊曾保物語 イソボ生涯の物語略]
- (16) その場に処の儉役が坐せられたに、驚ひとつ飛んできて、かの守護の指金を  
 ふくんでいづくとも知らず、とび去つたところで、その座にあり合つた万  
 民、これを怪み、「これは只事ではない」と言うて、  
 [天草版伊曾保物語 イソボ生涯の物語略]

他方、別の資料では「ところで」の前には「た」が来るのが普通である中で、狂言には、「終止形」および「—じゃところで」「—ぬところで」の形での用法もみえている。

- (17) (太郎冠者)御存(ござんじ)のこたく、すね(脛)にあかゞりがきれてござる所  
 で、水をみまらすれ共、六こん(根)へこたえてうづきまらするほどに、まし  
 (増)てやわた(渡)る事は、中々なりませぬ  
 [大蔵虎明本狂言 あかゞり]

- (18) (主)あ(会)ふ事はくるしからぬが、あの人はそうじて人のうわさ(噂)を、なんのかのときそへもいてい(言)はるゝげなが、つつとそれに依てめはづかしひ人じや所で、あの人の前へつかはふものがなひよ

[大蔵虎明本狂言 口まね]

- (19) (男)爰にきも(肝)をいつておこされた人が御ざある程に、あれへまいつて、談合(だんかふ)いたさう、何といひてもかほ(顔)をみ(見)せぬ所で、きづか(気遣)ひに御ざる、参る程に是じや、物申(ものまう)

[大蔵虎明本狂言 いははし]

このことは次第に形態的に複合辞化していくようすをうかがわせるものである。

そして、『天草版伊曾保物語』では場面を表す用法が多く、それを「ところで」だけではなく用例(20)(21)のように「ところへ」「ところに」などの形でも用いられバラエティに富んでいる。

- (20) ある時シャント沈酔してゐるところへ、人がきて「大海の潮を一口飲みつくさるる道があろうか」と問ふに、

[天草版伊曾保物語 イソボ生涯の物語略]

- (21) ある時イソボが主人旅をせらるるに及うで、下人どもに荷物を負せらるところに、イソボ荷奉行にいふは、

[天草版伊曾保物語 イソボ生涯の物語略]

「ところに」「ところへ」「ところで」は当初は意味的に区別はなく、同じ意味で使われたが、その中で「ところで」だけが条件を表す新しい複合辞として定着していくのである。言い換えれば、「ところで」に比べ、「ところに」「ところへ」は、助詞「に」「へ」のそれぞれの働きがまだ強いため、複合辞として定着しなかつたといえよう。

「ところで」の場合も「ところが」と同じく、鶴岡昭夫<sup>8)</sup>によると、その初出は『天草版伊曾保(1593)』の用例で、順接確定表現を表すものである。

- (22) 然らばこの宝は国王に捧げうずるものぢやといふたところでシャント多きに

8) 前掲論文(3)、49頁

驚き

[天草版伊曾保物語 イソボ生涯の物語略]

しかし、今回の調査では、それより70年以上早い『中華若木詩抄(1520頃)』に確認できた。

(23) よわき風がそろそろと吹ところて、つもりたる雪が乱れてちるぞ

[中華若木詩抄 下]

古くは、「ところにて」という形で順接確定条件に近い用法を表す用例があった。

(24) かの花散里(ちるさと)も、あざやかに今(いま)めかしうなどは、花やぎ給はぬ所にて、御目移(めうつ)し、こよなからぬに、咎(とが)、多(おほ)う隠(かく)れにけり。  
[源氏物語 蓬生]

「花散里は～というお方であって」とも解されるし、また「花散里は～というお方なので」とも解釈することができる。このことから、最初は「ところにて」という用法から順接確定条件が派生したのではないかと思われる。

ちなみに、『大蔵虎明本狂言』でも「ところにて」が順接確定用法で使われている。

(25) (住持)そのうへあさ(麻)のころも(衣)に、かみ(紙)のふすま(衾)まふけやす(設易)ふして、道心の望すくなし、十疋のふせ(布施)をとつて、まんなからおしきつて、半分は留守居のじゆなにあてがふて、ゑんそ(塩噌)たきゞ(薪)をもとめさせ、のこる所にて、かみ(紙)をか(買)ふて、ふすま(衾)にして、だるまかづ(達磨被)きにして、ざぜんくふう(坐禅工夫)をするならば、ぬす(盗)人もめ(目)をはかけまじひほどに、われもたす(助)かり、人をもたす(助)けてこそ、出家のかい(甲斐)は有べけれ、

[大蔵虎明本狂言 どちはぐれ]

この例も「残るお金で」とも「(お金が)残るので」とも解することができる。そして、上方語資料では「ところが」がまったく見えない反面、「ところで」は上方語でよく使われていたようである。

そして、『大蔵虎明本狂言』では「ところが」は全く見られず、順接確定を表す「ところで」が圧倒的に多い。ただ、順接仮定を表す「ところで」も会話文に2例見える。

- (26) (掣)是は又さいV(再々)むこ入をなされてO 御ざる程に、あれへまいつて、  
むこ入のしつけやうだい(ヲ)、習てまいらふと存る、かやうの事をきかず  
は、そのまゝまひらふ所で、はち(恥)をかかふ、 [大蔵虎明本狂言 鶏掣]
- (27) (茶屋)まづあれの舟にの(乗)らふ所で、舟ちん(賃)はとこはふ  
[大蔵虎明本狂言 薩摩のかみ]

ここでは助動詞「う」に接続した形で用いられていることが注目される。

また、「ところで」の用例は、52例の中47例が会話文に現れていた。そして、靄岡昭夫は1884年以前までは「ところで」が順接確定条件だけの用法を有していたかと述べているが、今回の考察では用例は少ないが、上方語で「ところで」が順接仮定条件の用法をも持っていたことがわかった。

また、靄岡昭夫は「ところで」の順接確定条件は上方語でも江戸語でもなくなったと述べているが、数は少ないものの、まだその用例は見えている。なお、現代日本語で使われている逆接仮定条件の「ところで」の形式はまだこの時期では見えない。

## 4.2. 明治時代以降の「ところで」の様相

順接仮定を表す用例は『大蔵虎明本狂言』に現れてから、その用法が見えなかったが、1897年によりやく出現する。

- (28) 俺が百万円を積んだところで、昔の宮は獲られんのだ！  
[尾崎紅葉 金色夜叉]

そして、以前までは「ところで」の用法は順接確定用法がほとんどであったが、明治になると逆接仮定用法が増えはじめ、順接確定条件より逆接仮定条件が優勢となっていく。よりやく複合辞としての「ところで」が一般化してきたと言える。



〈表5〉 明治から大正時代の小説における「ところで」の様相

年度	用法	順接		逆接	
		仮定	確定	仮定	確定
1887				2	
1897		1		2	
1898				1	
1899				2	
1900				1	
1905				2	1
1906				13	
1907				2	
1909				4	
1910			1	19	
1911				2	
1912				20	2
1913			1		
1914				4	
1915				12	
1916				33	1
1918				2	
1920				2	
1924				1	
1926				1	
合計		1	2	125	4

そして、逆接仮定条件表現には、「ところが」と同じように、新しい連語形式が発達がしてくる。「—としたところで」「—にしたところで」「—てみたところで」がそれにあたる形式である。〈表6〉でわかるように、その頻出度は「ところが」に比べ、圧倒的に多い。

「ところで」は「ところが」の場合と違って、新しい連語形式が多く見えるが、それは「ところで」が「ところが」より複合辞として早く定着し、そのため現代日本語においてもはっきりと意味が確定されるのではなかろうか。

〈表6〉新しい連語形式を持っている「ところで」の様相

年度 \ 用法	「—としたところで」 (逆接仮定)	「—にしたところで」 (逆接仮定)	「—てみたところで」 (逆接仮定)
1887	1		
1897	1		
1905		1	
1906	4		1
1910	1	5	4
1912	2	7	
1915	1	1	
1916	1	20	
1918		2	
1924	1		
1926		1	
合計	12	37	5

(29) よしんばあの財産がお前の自由になるとしたところで、女の身に何十万と云ふ金はどうなる、何十万の金を女の身で面白く費へるかい。

[尾崎紅葉 金色夜叉]

(30) たとい他人の内行に探りを入れるにした所で、必ずしもそれ程下品な料簡から出るとは限らないという推断も付いて見ると、一旦硬直になった筋肉の底に、又温たかい血が通い始めて、徳義に逆らう吐気なしに、ただ興味という一点からこの問題を面白く眺める余裕も出来てきた。

[夏目漱石 彼岸過迄]

(31) 森彦の考えにも、ここで姉が帰郷してみたところで、家の方がどうなるものでも無い。

[島崎藤村 家]

用例(29) (30)のように、新しい複合形式は「よしんば」「たとい」、そして「仮に」「よし」などと呼応して使われる用例が多いのもその特徴である。このような用例は、複合辞としての「ところで」の定着がすすんでいく過程を裏付けるものと思われる。

## 5. おわりに

以上、「ところが」と「ところで」についておおまかにその変遷について見てきた。まず、今回の考察の結果を中心に特徴的な事項を挙げると、次の通りである。

- ① 複合辞としての「ところが」が定着したのは明治以降である。それまでは「ところが」の「が」に重心があったために、順接確定条件より逆接条件として広く使われていた。明治になると、形式名詞化した「ところ」の表す場面の提示の意が強くなって、順接条件でも用いられるようになり、次第に複合辞化されていったと見られる。
- ② 「ところが」の初出は『玉塵抄(1563年)』であって、逆接確定条件として用いられている。その後は上方語ではまったく使われず、江戸語に再び使われるようになる。
- ③ 明治以降、逆接假定条件が次第に増えていく。そして、これは「一てみたところが」「一にしたところが」という新しい連語形式が生じたこともあって、いっそう定着していった。
- ④ 複合辞としての「ところで」が定着したのは一六世紀である。形態としては、「ところにて」→「終止形+ところで」→「たところで」というように形式的に変化し、現在の複合辞として定着する。
- ⑤ 「ところで」が初出する資料は『中華若木詩抄(1520頃)』で、順接確定を表す用例が見られる。
- ⑥ 「ところで」は順接確定の用例が多いが、上方語では順接假定用法でも用いられた。
- ⑦ 明治時代になると、「ところで」は、「一としたところで」「一てみたところで」「一にしたところで」などの新しい連語形式をもつようになる。特に、この連語形式は「仮令」「よしんば」「仮に」「よし」などの副詞などと呼応して使われる場合が多く、このことは「ところで」が逆接假定条件を表す複合辞として定着したことを示している。

最後に、本考察で明らかになった「ところが」と「ところで」の変遷過程を簡単に図でまとめると、次の通りである。

「ところが」			
16世紀	上方語	江戸語	明治～
逆接確定(1563)		逆接確定	逆接確定
		逆接仮定	逆接仮定
		順接確定	順接確定
「ところで」			
16世紀	上方語	江戸語	明治～
順接確定(1520頃)	順接確定	順接確定	逆接仮定
	順接仮定	順接仮定	逆接確定

### 参考文献

- 石垣謙二(1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店、15-54頁
- 大野晋(1970) 「助詞の機能と解釈」 『解釈と鑑賞』第35巻 第13号 第442号』至文堂、10-23頁
- グループ・ジャマシイ(1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版、328-334頁
- 国立国語研究所(1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例』国立国語研究所報告3、119-124頁
- 阪倉篤義(1994) 『日本語表現の流れ』岩波書店、130-133頁
- 田中彰夫(2001) 『近代日本語の文法と表現』明治書院、581-610頁
- 齋岡昭夫(1972) 「「ところが」と「ところで」の通時的考察—その逆接仮定条件表現の成立をめぐって—」 『国語学88』国語学会、43-55頁
- 飛田良文他(2007) 『日本語学研究事典』明治書院
- 松村明(1696) 『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学灯社、410-415頁
- 森田良行・松木正恵(1989) 『日本語表現文型』アルク、113-114頁
- 湯沢幸吉郎(1936) 『徳川時代言葉の研究』刀江書院、612-614頁
- \_\_\_\_\_ (1957) 『江戸言葉の研究』明治書院、620-624頁

- ❖ 투고일 : 2009. 12. 31.
- ❖ 심사일 : 2010. 1. 11.
- ❖ 심사완료일 : 2010. 1. 20.